



# 造形活動が生み出す 子どもの変容の連鎖 大人への影響と園運営の質向上

《執筆者》新井 馨

西九州大学 准教授



## 概 要

本研究は、造形活動が子どもに与える影響とその変容が、大人（保育者・保護者）へ波及し、園全体の変化を生む過程を実践的に考察したものである。対象のこども園において、2023年度実施のアートワークショップを起点とし、その前後2022年、2024年と比較・検討した。研究の背景として、実践先の園では造形活動の重要性が認識されていたが、現場では「子どもがやりたいことに応えられているのか分からぬい」「造形活動を設定する自信がない」といった課題があった。こうした保育者の苦手意識が子どもたちの表現の幅を制限する要因になっていた。

本研究では、2023年度に「アートデイ」と称するワークショップを実施し、子どもの変容を分析した。その結果、①自己表現への自信の向上、②他者との関わりの深化、③日常生活における主体性の向上の三点が確認された。次に、保育者の視点の変容を検討するため、ワークショップ前年（2022年）と当年（2023年）の保育日誌を分析した。2022年度は「子どもが活動している様子」を中心とした記述が多くあったが、2023年度には「子どもがどのように考え、試行錯誤しているか」に焦点が移り、造形活動における学びの過程を見取る視点が強まっていた。

さらに、アンケート調査を通じて、子ども・保育者の変容が園や保護者へ与えた影響を分析した。アンケートでは、91.7%の保護者が子どもの創造力や表現力の変化を実感し、家庭での遊び方にも影響が見られたと回答。また、園長の回答から、子ども主体の学びを重視する園の方針が強化されたことが明らかになった。

このように、造形活動による子どもの変容が波及する様相

を示すことができた。この結果は、普段の保育へのまなざしの変化を自覚しながら言語化に苦労していた保育者の自信にもつながり、さらなる良いサイクルを生むと考えられる。

## 目 次

1. テーマ設定の理由と目的
  - 1.1 研究の背景と目的
  - 1.2 方法
2. これまでの研究【第一段階】
  - 2.1 保育者との協働によるアートワークショップの構成と子どもの変容
3. 【第二段階】保育者の視点の変容
  - 3.1 分析方法
  - 3.2 分析結果
  - 3.3 保育者による造形活動の実践例
4. 【第三段階】アンケート調査から考察する保護者、園全体への変容
  - 4.1 アンケート・聞き取り調査の概要
  - 4.2 園全体への影響
  - 4.3 保護者への影響
5. まとめ

## 1. テーマ設定の理由と目的

### 1.1 研究の背景と目的

本研究は、造形活動を通した子どもの変容が、保育者や保護者といった大人の意識や関わり方に影響を及ぼし、さらに園全体の教育観や方針に波及していく過程を明らかにするものである。

近年、社会の多様化や不確実性の高まりを背景に、幼児期における表現活動の意義が再評価されている。特に造形活動は、観察力や創造力、コミュニケーション力の育成に寄与するのみならず、子ども自身が内面を探究し、他者と関わる手段として重要な位置を占めている。幼稚園教育要領においても、幼児期の表現は生活経験と密接に関わっており、自己表現の基盤として位置づけられており、造形活動では、多種多様な素材に自身の身体を通して関わり、つくり・つくりかえるといった連続性の中で、当人なりの意味を生成していく一連の活動が行われる。特に幼児教育における造形活動においては、幼稚園教育要領にあるとおり、「幼児の自己表現は素朴な形で行われる<sup>1</sup>」ものであり、その表現は当人の生活経験の中から生み出されることが多い。つまり、保育者が、子どもが日々の生活の中で今何に興味・関心をいだいているのか観察し、子どもたちがやってみたい！と思えるような活動を設定することが、子どもたちの表現へと向かう場づくりにつな繋がっていき、それが子どもの生きる世界での一体的な学びにも繋がるものと考える。

一方で、現場の保育者の中には「子どものやりたいことに応えられているのか分からない」「造形活動をどう設定すればよいか自信がない」といった声も少なくない。こうした不安や苦手意識が、子どもの自由な表現や主体的な学びの機会を制限している実態もあるのではないかと考える。本研究は、こうした現場の保育者が抱える造形活動への苦手意識に正面から向き合い、それを乗り越えるための具体的な支援のあり方を明らかにすることを一つの目的としている。保育者自身が表現活動への理解を深め、自信をもって取り組めるようになることは、子どもの豊かな表現を引き出す上で不可欠であり、保育実践の質の向上にも直結する重要な課題であると捉えている。今回、実践の場である武雄こども園でも当初同様の声が聞かれた。本園では、2020年より一斉保育から子ども主体の保育への転換を図る取り組みが行われてきたが、造形活動においては試行錯誤が続いていた。そのため造形活動とはどういったものか、執筆者と保育者で対話を重ねながら、保育者が経験的に理解していくことを促すことで園全体の変容を図った。

具体的には2023年度に取り入れたアートワークショップ「アートデイ」を通して、子ども・保育者・保護者の三者の変容を多面的に捉え、次の3点を明らかにすることを目的とした。<sup>①</sup>子どもが主体的に造形活動に関わることで見られる行動・意識の変化、<sup>②</sup>子どもの姿に触れた保育者の記述や実践の変化、<sup>③</sup>保護者および園全体における意識や環境の変化、である。これらの変化を2022～2024年度の3年間を対象に、アクションリサーチの手法を用いて記述・分析することで、子どもの変容が大人たちへどのように波及し、互いの相互関係にどのように影響したのかを明らかにする。そのため、<sup>①</sup>造形活動に参加する子どもの観察と記録、<sup>②</sup>保育日誌の質的分析、<sup>③</sup>保育者・保護者・園長へのアンケート調査を通して、造形活動が引き起こす連鎖的な変容の過程を明らかにする。

### 1.2 方法

本研究は、2022年度から2024年度までの3年間を対象とし、実践の積み重ねを通じて、造形活動がもたらす子ども・保育者・保護者・園全体の変化を質的に分析した。研究対象は、筆者がアートコミュニケーターとして継続的に関わった佐賀県にある武雄こども園である。研究は以下の三段階に分け、対象期間における子ども、保育者、保護者・園の変容について見取る。

#### 【第一段階】保育者との協働による

##### アートワークショップの構成と子どもの変容

2023年度に実施した5歳児対象のアートワークショップ（全4回）における子どもの行動や発話、作品等を観察・記録・分析し、自己表現・他者との関係・日常生活への影響に注目して考察を行った。なお、本段階の一部成果（子どもの変容）は『西九州大学子ども学部紀要 第15号』にて発表済みであるが、本論ではさらにクラス全体における変容と大人への影響の兆しについて改めて見直し考察する。

#### 【第二段階】保育者の視点の変容

第一段階の考察を経て、子どもの変容が保育士たちへどのように波及したのか、子どもと大人（保育士）との間にどのような相互関係が生じたのか、アートワークショップを実施した2023年度とその前年2022年度における担任保育者2名の保育日誌を比較分析した。造形活動に関する記述を抽出し、主題分析およびエピソード分析を行うことで、保育者のまなざしや記述内容の変化を質的に検討した。

### 【第三段階】アンケート調査から考察する保護者、園全体への変容

さらに造形活動の波及効果を検証するため、園長・保育者・保護者を対象としたアンケート調査および自由記述による聞き取りを実施した。アンケート対象者は、園長、ワークショップ実施時の5歳児担任保育者2名、現在在園している保護者と2023年当時ワークショップを受けた5歳児児童の保護者とした。なお、保護者は、在園児保護者24名、卒園児保護者5名の計29名から回答を得られた。アンケートの回答結果をもとに、保育者の造形活動に対する意識変化や、園全体への変容について考察した。

## 2. これまでの研究【第一段階】

### 2.1 保育者との協働によるアートワークショップの構成と子どもの変容

本研究の第一段階では、2023年度に武雄こども園で実施したアートワークショップ（以下、アートデイ）を対象とし、保育者との協働によって構成された造形活動が、子どもの表現と行動にどのような変化をもたらしたのかを記述・考察する。

本園では、2020年以降、子ども主体の教育実践を目指してきた。造形活動においてもそれまでのゴールありきの造形活動から、子ども主体のものへと変えようと試行錯誤が行われていた。しかし、これまでの造形活動が「完成品の提示・作品掲示」「制作帳への貼付」といった一斉保育的要素に強く依拠しており、子ども主体の表現や保育者の創造的関与が十分に発揮されにくく実情があった。2023年4月より、筆者がアート講師として参画し、保育者との継続的な対話を通じて、造形活動における課題の共有と改善に取り組むことに

なった。対話の中で明らかになったのは、「子どもたちが描くことに自信を持てていない」「絵の具やクレヨンへの抵抗感がある」「どう支援していいのかわからない」という保育者自身の戸惑いや不安であった。こうした課題を踏まえ、まずは保育者に向けた2回の講義とワークショップを行った。しかし、実践後に寄せられた声から、理論的な理解と実際の保育現場とのあいだに依然として隔たりがあることが浮かび上がった。ある保育者は「造形活動の重要性は理解しているが、実際に子どもたちを前にすると、自分のやり方が本当に適切なのかわからなくなる」と語り、別の保育者は「子どもが楽しそうにしていることで安心してしまい、つい“すごいね”“よかったね”としか声をかけられなくなる」と振り返った。こうした声から、保育者の内的な変容を促すには、子どもたちの表現の現場を直接見取り、その過程に立ち会う経験が不可欠であると判断し、以降は保育者と協働で構成したアートデイを中心とする方針へと転換した。

アートデイは、保育者との事前ミーティングにおいて子どもの実態を共有し合いながら、活動内容を設計した。ここでは5歳児クラスを対象に、年間4回実施したアートデイについて記す。

第1回（5月）は、「描くことが苦手」という子どもたちの抵抗感を受け、線を自由に描いた中から生き物を見つけ出すという活動を設定した。正解のない遊びを通して、自分の見立てに価値を見出し、線の世界に夢中になる姿が次々に現れた。「描くこと＝評価されること」という無言の枠から解き放たれ、子どもが描いた線や形に対して、自ら意味や物語性を見出し、想像を広げる姿が見られた。（図1）

第2回（8月）は、端材やビニールテープを使った日常の遊びから着想を得て、保育室をPEテープで空間的に変容させる活動を行った。床に寝ころび張り巡らせたPEテープを



図1 第1回の様子



図2 第2回の様子



図3 第3回の様子

見て「宝石みたい」「宇宙みたい」と言葉がこぼれていた。自分たちの手で環境を変える体験を通じて、身体全体で表現と空間を味わう時間となった。環境と対話しながら創造するという、新たな造形の可能性が拓かれた。(図2)

第3回（9月）は、混色や液体の動きに関心を示す子どもの姿から、「自分だけの色水をづくりから応援旗を描く」活動へと展開した。水に溶けた色が紙の上で広がる様子に歓声が上がり、「春みたいな色!」「虹になった!」と感性を言葉にする子どもたちがいた。偶発的に生まれる色の変化や混ざり合いを楽しむ過程を通して、感覚的な気づきと情緒的な応答が創造行為に結びついている姿があった。(図3)

第4回（12月）は、年間の集大成として、自分の身体の輪郭を写しとる「人拓」づくりを実施した。子どもは自らポーズを決め、ペアの友達が線を引き、切り抜かれた自分のかたちに思い思いの色や言葉を書き込んだ。自分の身体と向き合い、日々の出来事や記憶を重ねていくその姿からは、「自分を描くこと」への肯定感が確かに育まれていることが伝わってきた。(図4)

以上、4回のアートディと保育者との振り返りから次の変容が見て取れた。(表1)

### 【子どもの変容】

子どもたちは以下のような変容が見られた。

#### ①自己表現の自信の向上

自由な表現を肯定される経験を通じて、自分の考えやイメージを表現することに対して積極的になり、自己肯定感が高まった。

#### ②他者との関わりの深化

他者の作品を認め、語り合い、協働する姿が増加し、相互理解と共感的関係が育まれた。

#### ③日常生活における自立の促進

造形活動で得た経験は日常生活にも広がり、子どもたちは自ら考え、選び、行動する姿を見せるようになった。

### 【クラスの変容】

子ども一人一人の変容が積み重なり、クラス全体にも以下のようない影響が見られた。

#### ①造形活動のアプローチの転換

保育者主導から子ども主体への転換が進み、子どもの関心や発想を起点とした活動が展開されるようになった。

#### ②相互理解の促進

表現を介した対話が増え、子ども同士の関係性が豊かになったことで、クラス内における信頼関係が深まった。

#### ③保育者のまなざしの変化

子どもの姿に促される形で、保育者が「評価する」視点から「ありのままを受け止める」視点へと移行しつつある兆しが見られた。



図4 第4回の様子

表1 全4回アートディのねらいと内容

	ねらい	内容
第1回	想像力をもって、様々な生きものを見つけ着彩することを楽しみ、描画体験を豊かにする。	1. 紙にできるだけ多くの曲線を描く。 2. 入り組んだ線から生きものを見つけ、クレヨンで彩色する。
第2回	PEテープが見せる“いつもの場所”的変化から、発想したことを実行することを楽しむ。	1. PEテープを部屋の対角線上に張る。 2. 思いついたことを追加で張ったり、吊るしたりして“様変わりした保育室”を楽しむ。
第3回	色水の混色や、紙に垂らしたときの発色を楽しむ。	1. 三原色をベースに自由に混ぜて“自分だけの色水”をつくる。 2. できた色水を紙の上に撒いたり流したりして、色のにじみや混ざり合いを体験する。
第4回	体全体を使って活動すること、思いのままに描くことを楽しむ。	1. 大きな紙の上で好きなポーズをとり、ペアの友達がその輪郭をとる。 2. 自分の身体のかたちを切り取り、自由に色や形を描き加えて“人拓”にする。

アートデイは限られた回数での活動である。ここで学びを保育者が日常の保育に活用していくことを意識した。そのためアートデイ活動中、筆者は一貫して「なぜこの色にしたの？」「これは何に見える？」「違う材料だったらどうなると思う？」といった探究的な発問を子どもたちに意識的に行なった。これらの問い合わせは、子どもの内的な動機や思考を引き出すと同時に、保育者にも新たな視点をもたらした。活動後には、保育者から「子どもに“すごいね”と言う代わりに、“どうやって思いついたの？”と聞くようにしてみた」「アートデイでの問い合わせを、日常の造形遊びでも意識して取り入れるようになった」といった振り返りが聞かれた。つまり、筆者の子どもへの問い合わせが、保育者自身の問い合わせを拓き、保育の日常に接続されていく過程が生まれ始めていたのである。これらの変化は、アートデイという一過性の経験にとどまらず、子どもが経験をつなぎながら主体的に学び続ける姿勢と、保育者がその姿から影響を受け、日常の保育を変えていくという、双方向の変容プロセスによって支えられているものと捉えている。このように、アートデイは創作の場であると同時に、保育のまなざしそのものを問い合わせ直す場となっていた。<sup>2</sup>

2023年保育日誌

5歳児6ヶ月間指導計画

子どもの姿	ねらい	・指輪類を健康、安全に過ごせるようにする。 ・指輪類は大切な自然物に興味、関心を持つ。 ・自分の指輪類でうつろい遊びをする際には自分で遊ぶことをめざす。	・食事時における時間と距離を守る。 ・食事時の静けさを守る。 ・友だちと会話をひらく。新しい団体へ出でても食べること。 ・友だちと一緒に手洗いの補助の大切さを身にまといなうこと。
家庭との連携	行事	・10月 15日 桑の木スリー 内科検診	下旬: 遊鑑訓練 身体測定

マッピングで記す箇所が大きくなかった

養護 内容	環境構成	援助應處	今月の活動	
			活動	環境構成・援助配慮
遊びや活動の内容にじっくりおもかげをもつて、遊びや活動の内容をじっくりおもかげをして、仲間に遊ぶ事。			<p>第1週</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・户外遊び（園庭、砂場）</li> <li>・サイクス（鏡餅類、絵画）</li> <li>・窓石作り</li> </ul> <p>第2週</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・户外遊び</li> <li>・サイクス</li> <li>・雨の日の制作</li> </ul> <p>第3週</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろごはり・やし遊び</li> <li>・いろあみ作り・窓石世界作り</li> <li>・カラーステー</li> <li>・身体測定</li> </ul> <p>第4週</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・遊鑑訓練</li> <li>・窓石世界作り</li> <li>・やし遊び</li> <li>・磨き石</li> </ul> <p>第5週</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・户外遊び</li> <li>・窓石の世界(下)</li> <li>・結婚遊び</li> </ul>	<p>子どもの遊び、楽しむ時間、興味、関心を大切にしていく。 子ども自身の表現を見出し、発展の方向へ向けての支援等をこれまでの経験を通じて、自分で遊びを進める面白さを教えていく。 道具の操作練習を通して、自分でまずは道具の練習を行なう。 一緒に遊びながら、遊びの規則、手順等についてのルールを理解させていく。</p> <p>雨の日の户外遊びをどうぞよろしくお願いします。 子どもがイヤイヤしてからも、雨の中でも遊んでほしいので準備してみてください。 窓石世界の絵や模型等に対する興味や驚きに対する興味等につれて一緒に操作しながら、世界に興味を持たせたい。 窓石世界についての興味をもつていて遊びを進めよう。道具等を手に操作してみてください。</p> <p>子どもの遊び、楽しむ時間、興味、関心を大切にしていく。 練習等特に慣らしのよろしく、遊びの方向性に取り組みます。 自分の興味をもつて、自分の興味を自分で自分で入れていく事の大切さや、自分の興味を大切にしていく。 道具等が道具として、道具として楽しむ事で、自分で自分の興味が動き出すような公園園芸を作ります。</p> <p>子どもイメージに合わせて使う道具等を準備してみてください。 新規遊びに慣らす事で、子どもたちの動きに対する覚えをもつてお遊びがつながります。 「新しい遊び」遊びはまだ知らない子たちが遊び始めたら、他の遊びに誘導していく。 「他の遊び」遊びは既にいる子たちが遊び始めたら、他の遊びに誘導していく。</p>

図5 2022年保育日誌（A4サイズ）と2023年保育日誌（A3サイズ、1枚目）の比較  
比較すると活動のつながりをマッピングで記す箇所が大きくなっている。

### 3. 【第二段階】保育者の視点の変容

次に、アートデイ前後（2022～2023年）にかけての保育者の視点の変容を明らかにするため、対象保育者（実施時の5歳児担任保育者2名）による2年間の保育日誌を分析した。特に、「アートデイ」という新たな活動を導入したことによって、子どもの主体性や探究活動が深まり、それに伴い保育者の子どもに対する視点も変化したことに注目した。

### 3.1 分析方法

分析対象とした保育日誌の中で造形活動に関するコメントは、2022年が61件、2023年が33件であった。なお、件数が減少している理由として、保育日誌のフォーマットが変更され、2022年度のものより簡素化されコメントを書くスペースが小さくなかったこと、またコメントを書く際の参考的な視点が示されたことが要因と考えられる(図5、6)。それら抜き出した造形活動に関するコメントを、主題分析とエビ

ソード分析を行った。それぞれの主題カテゴリーの分類基準は、分類結果とともに、表2・図7（16ページ参照）に記す。

### 3.2 分析結果

【主題分析】

前述のとおり分析した結果、まず「活動する子ども」に関する記録の割合が、2022年の56.1%から2023年の16%へと大幅に減少している。2022年は子どもの楽しさや活動の様子に重点が置かれていたのに対し、2023年にはその比重が大きく下がったことがわかる。

次に、「創造する子ども」では、31.6%から38%へと増加している。この変化は、子どもの思いつきや発見、そこから生まれる表現を捉える視点が強まることを示している。また、「探究し学ぶ子ども」では、5.3%から34%へと顕著に増加している。このことから、保育者の視点が子どもの活動の結果よりも、子どもがどのように思考し、試行錯誤を重ねるのか、という過程に向けられるようになったと考えられる。

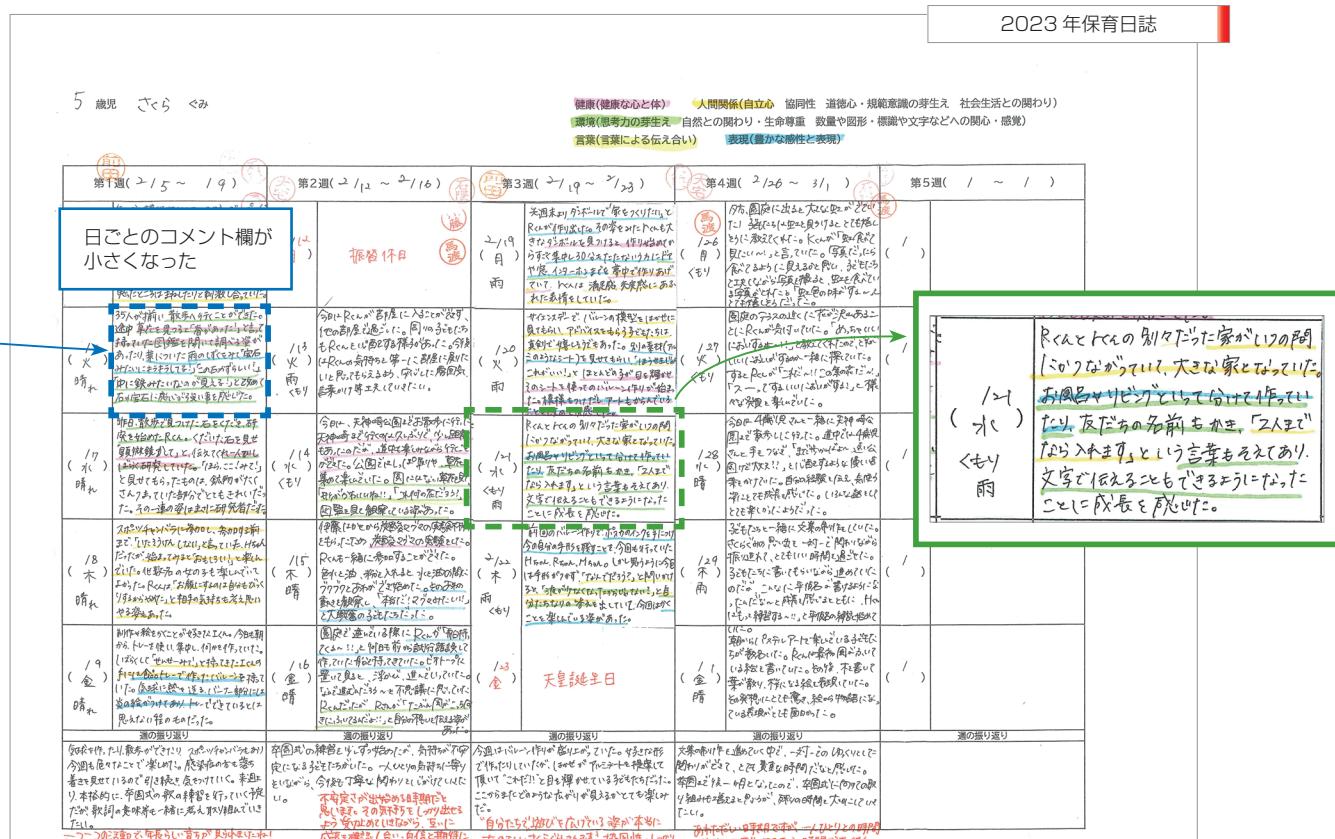


図6 2022年保育日誌（A4サイズ）と2023年保育日誌（A3サイズ、2枚目）の比較

表2 カテゴリ一分類基準

カテゴリー	活動する子ども	創造する子ども	探究し学ぶ子ども	関わりあう子どもたち	その他
分類基準	子どもが楽しんでいる様子や活動の報告	子どもの発見や発想、表現する	自分なりに疑問をもったり、試行錯誤する姿	子ども同士の協働・相互作用	左記以外のもの

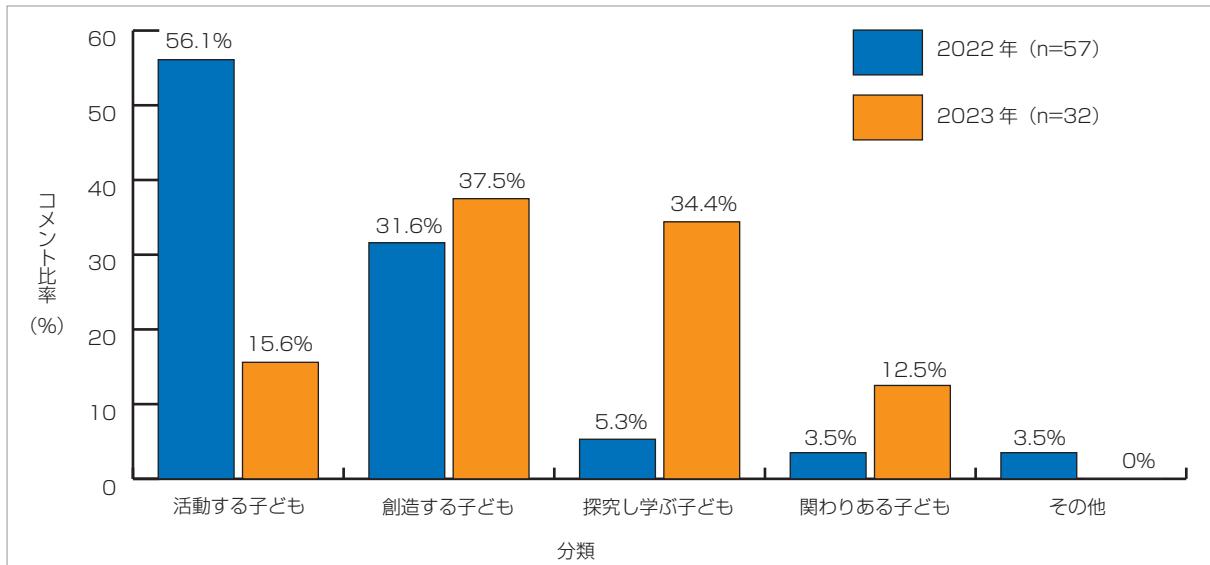


図7 主題分析の結果「分類別コメント比率」(2022年・2023年)

さらに、「関わりあう子どもたち」に関する記録の割合も、3.5%から13%へと増加している。これは、個々の活動だけでなく、子ども同士の関わりや相互作用が学びの場において重要な要素であるという認識が高まっていることを示唆している。

主題分析の割合の増減から、2022年には子どもの活動や楽しさの記録が中心であったのに対し、2023年には子どもの主体的な学びや思考の過程、他者との関わりに重点を置いた視点へと移行したことが明らかとなった。この変化は、単に子どもが活動する姿を観察するのではなく、その活動の中で子どもがどのように考え、どのように学んでいるのかといった、内面的な成長や探究活動の重要性が認識されるようになったことが予想される。そこで、次に、各カテゴリーのコメントの質が2022年と2023年どのように変化しているのか、エピソード分析を行った。

## 【エピソード分析】

### ① 「創造する子ども」の視点の変化

2022年の保育記録では、「何をつくったか」「どんな活動をしたか」といった活動の概要や成果に焦点が置かれていた。たとえば「今日は恐竜の夜の世界をつくろう！」と絵の

具遊びをした」といった記述は、活動内容を示すにとどまり、子どもの発想や工夫の過程に迫る視点は乏しかった。一方、2023年の記述では、創造のプロセスに注目が向けられるようになっていた。たとえば「今日は木の枝を使って家をつくったが、『木だけだと倒れちゃうね』と話しながら、砂や石で固定する方法を考えていた」といった記述からは、子どもの試行錯誤や問題解決の思考過程が丁寧に捉えられている。創造的活動が“つくる”ではなく、思考と選択を伴う実践として捉えられるようになった変化が読み取れる。

### ② 「探究し学ぶ子ども」の視点の変化

同様に、2022年の記述では「紫キャベツの液で染めた紙にお酢・レモン汁を使ってお絵かきをした」といったように、活動の工程や結果の説明が中心であった。しかし2023年には、「ドングリの木にまた実がなっているのを見て、『なんでこんなにあるんだろう？』と考えながら集めていた」といったように、子どもが自ら問いをもち、思考を深める様子が捉えられている。この変化は、活動を単なる経験として記述するのではなく、子どもの探究心や思考の過程を中心に据える視点への転換を示していると考える。



図8 空を飛べるかもしれない傘を持ち、  
保育者が水（雨）をかけている



図9 私と傘が一体に！



図10 飛行船をつくる前に、まずは大きな浮かぶ袋をつくりてみた



図11 自分の手をスタンプしている様子



図12 飛行船に思い思いの色で絵つけ

### ③「関わりあう子どもたち」の視点の変化

2022年の記録では、「気の合う友達同士で遊んでいた」といった関係の概要にとどまり、子ども同士の関わりのプロセスや協働の詳細は記されていなかった。2023年の記述では、「Rくんとrくんの別々だった家がつながり、『ここに窓があつたらいいね』と話していた」とあるように、子ども同士が対話を通じてアイデアを共有し、共同で創造していく様子が具体的に描かれている。このような記述は、子ども同士の関係性の質的深化を保育者が見取っていることを如実に物語っている。

これらの変化から明らかになるのは、「活動する子ども」という表層的な記述カテゴリーが減少し、「創造する子ども」「探究し学ぶ子ども」「関わりあう子どもたち」へと、より内面的・関係的な視点が重視されるようになったという点である。

2023年の記述では、子どもたちが自ら考え、試行錯誤し、対話を通して学びを深めている様子が数多く見られた。つまり、子どもたちがより主体的に学び、創造するようになったことで、保育者もその姿勢を捉え、記述に反映させるようになったと考えられる。これは、保育者が視点を変えた結果として子どもが変わったのではなく、子どもの変容があったからである。

らこそ、保育者の視点も変わったという重要な点だと考える。アートディーを通して、またそれを日々の造形活動に取り入れ実践することを通して、探究的で創造的な学びを体現する子どもたちの姿があった。この姿に触れたことで、保育者の観察や記述の内容も、より深いものへと変化していったのではないだろうか。

### 3.3 保育者による造形活動の実践例

このような保育者の子どもを見るとの視点の変化は、実際の保育の実践にも影響を与えたと考えられる。2024年度の造形活動の中の顕著な例を紹介する。それは、「空を飛びたい」という子どもの声をきっかけに始まり、傘づくりから飛行船づくりへと発展した活動である。保育者は子どもの発想や探究に耳を傾け、活動と共に紡いでいった。空を飛べるかもしれない傘をつくり、つくったものに雨（水道水）を降らせてみたり、自らが傘になる子どももいた。その後空想だけでなく、実際飛ばせる飛行船づくりへと発展した。この姿勢は、アートディーでの経験を起点に、変容する子どもの姿に応答しながら、自らも関わり方を深めてきた保育者の実践の積み重ねとして現れている。(図8～12)

## 4. 【第三段階】アンケート調査から考察する保護者、園全体への変容

これまでの分析で明らかになったのは、子どもたちが造形活動を通じて主体的に表現するようになり、その変容が保育者の実践や意識に深く影響を与えていたという点である。2023年度、継続的に実施したアートデイの中で、子どもたちの姿勢は明らかに変化し、保育者たちもその変化を確かに感じ取っていた。

この実感に基づき、2024年度は特定のアートデイをあえて設けず、造形活動の実施を保育者の裁量に委ねた。日常保育の中で生まれる迷いや問い合わせには、定期的なミーティングで対話を重ね、必要に応じて助言を行った。園を訪れるたびに、保育者たちは自身の内なる変化を語り、喜びと手応えをもって報告してくれた。こうした変化は、特定の保育者だけでなく、園全体にじわじわと広がり始めていた。

本章では、この変容が保護者や園全体にどのように波及していったのかを、アンケートと聞き取り調査の結果から考察する。

表3 アンケート概要

対象者	主な質問内容
在園児の保護者（24名）	子どもの創造力や表現の変化について／家庭での造形活動の影響について
卒園児の保護者（5名）	卒園後の創作活動の継続性／造形活動が小学校生活に与えた影響
園長（1名）	園の造形活動の意義／教育方針への影響

図13 お子さんの創造力や表現に関して、以前と比べて変化を感じますか？（2023年以降）

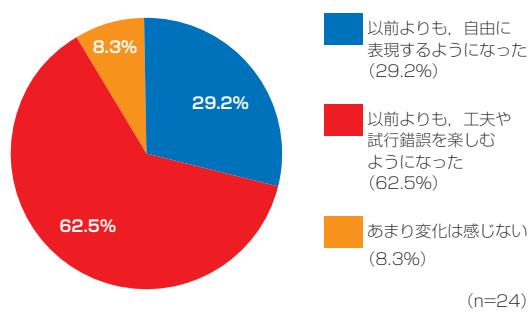


図14 お子さんの家庭での遊びや表現の仕方に園での造形活動の影響を感じますか？（2023年以降）

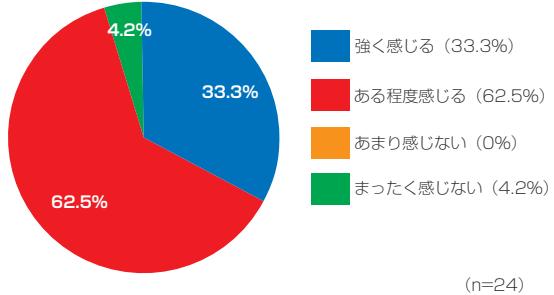


図15 お子さんの家庭での遊びや表現の仕方に園での造形活動の影響を感じますか？（2023年以降）

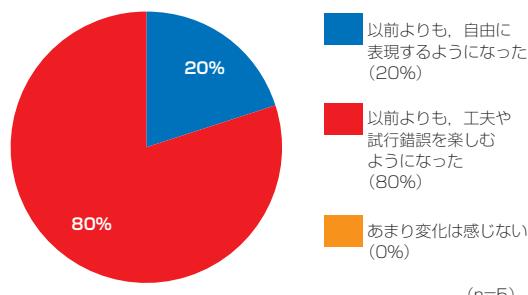
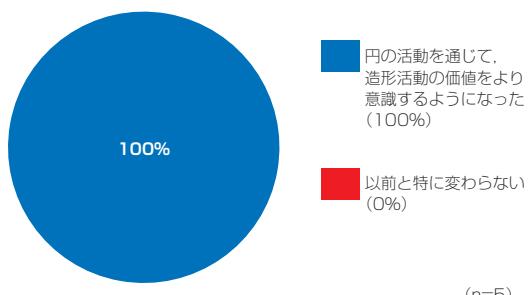


図16 造形活動に対するご自身の考え方について変化はありましたか？（2024年以降）



#### 4.1. アンケート・聞き取り調査の概要

本調査は、造形活動を通じた変容が園全体に及ぼす影響の広がりを明らかにすることを目的とし，在園児・卒園児（アートディイ経験者）の保護者、園長、保育者を対象に実施した。主な質問項目や回答者数は表3に示す。

#### 4.2. 園全体への影響

造形活動の実践は、子どもや特定の保育者の変容にとどまらず、園全体の教育観にまで影響を及ぼしていた。園長からは、「子どもの表現の幅が広がり、保育者の関わり方が変化した」という声が寄せられ、これにより園としての造形活動への方針も見直されることになった。また、保育者同士の対話や実践の共有から、作品の完成度よりも、子どもが創造する過程を重視する、という視点が広がっていた。さらに今後について「子どもが時間に縛られず、じっくりと表現に向き合える環境を整えたい」という声が聞かれた。こうした姿勢の変化は、単なる技法や方法論にとどまらず、子どもの内面に寄り添うまなざしの獲得であり、園全体の教育理念の深化にもつながっていることがわかる。

#### 4.3. 保護者への影響

造形活動の実践が保護者の意識に変化をもたらしたことは、在園児の保護者からの回答に顕著に表れている。例えば、設問「お子さんの創造力や表現に関して、以前と比べて変化を感じることはありますか？」では、91.7%の保護者が変化を感じていると回答している。（図13）

また、「お子さんの家庭での遊びや表現の仕方に園での造形活動の影響を感じるか」の問には95.8%の保護者が感じると回答した（図14）。これは、園での活動を通して、保護者が子どもの発達段階や創造力の広がりを実感していることが伺える。

また、アートディイを受けた卒園児の保護者からは、設問「お子さんの創造力や表現に関して、以前と比べて変化を感じることはありますか？」では、80%の保護者が変化を感じており、「以前より工夫や試行錯誤を楽しむようになった」とコメントがあった（図15）。さらに造形活動に対する考え方の変化を問う設問に、「園の活動から造形活動の価値をより意識するようになった」と100%の回答があった（図16）。

このように、保護者は園での造形活動を通して、子どもの創造性に対し理解を深め、変化を感じていることがわかる。そして、自由記述の中には、「園で思う存分造形活動を楽しんだ経験があるからか、今でも時々ダンボールや色々な素材

を使って何かをつくろうとする」という声もあり、園での造形体験が長期的な影響を持ち続けることも示唆される。

#### 5. まとめ

本研究は、アートディイを契機に生まれた子どもの変容が、保育者や保護者のまなざしを揺るがし、園全体の造形活動の在り方を根本から問い合わせ持っていたことを明らかにした。子どもが表現することに喜びを見出し、夢中で創造に向かう姿に触れたとき、大人はそのまなざしを変えずにはいられない。子どもの学びを丁寧に見取り、共にいることの意味を問い合わせ持つ。その積み重ねが、園の保育環境や家庭での関わり方にまで波及していった。この変容の根底には、「表現とは生きる力そのものである」という確かな実感がある。子どもたちは本来、あふれるような表現の力を備えている。しかしその声が、大人の枠組みの中で押しとどめられてしまうこともある。だからこそ、大人がその表現に立ち止まり、耳を澄ますとき、子どもは世界に向けてもう一歩踏み出すことができる。そして、大人自身もまた、子どもの姿を通して揺さぶられ、変わっていくものだと見える。

本研究は一園の実践にすぎないが、そこに込められた変容の芽は、どの現場にも宿りうるものだと信じている。子どもの表現に本気で向き合うとき、教育はただ教える場ではなく、共に生きる場へと変わっていくものだと考える。

（あらい・かおり）

#### 謝辞

本研究の実施にあたり、多大なるご協力をいただいた武雄こども園の園長先生をはじめ、保育者の皆さま、そして子どもたちに心より感謝申し上げます。現場での丁寧な実践と率直なご意見が、本研究を豊かなものにしてくれました。記して感謝の意を表します。

#### 付記

本論文に掲載している写真については、すべて掲載の同意を得たうえで使用しています。

#### [注]

1. 文部科学省『幼稚園教育要領』、平成20年3月

2 「こども園における造形活動を通した子どもの変容－保育者の視点から－」、『西九州大学子ども学部紀要』、2024、第15号、pp.1-12